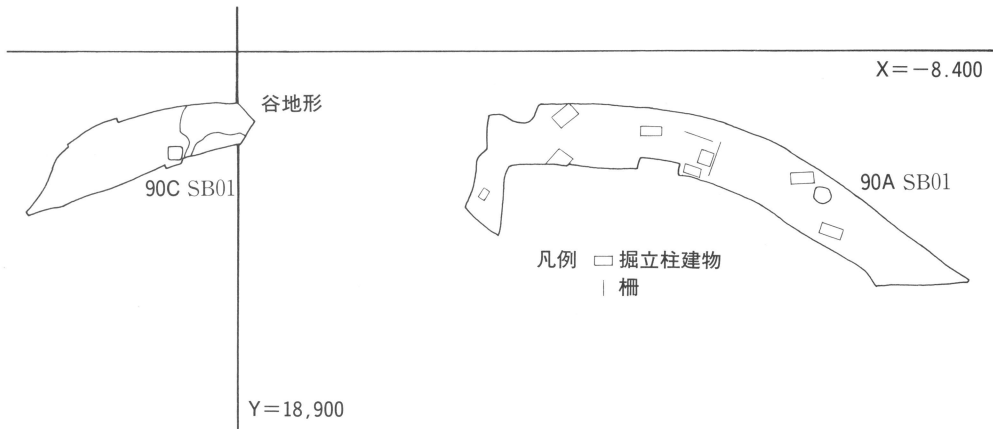


うわ まん ば
上 万 場 遺 跡

調査の経過 上万場遺跡は、東加茂郡旭町に所在している。今回の調査は県道瑞浪大野瀬線建設に伴うもので、調査区は中央に所在している谷を挟んで、2か所に設定し、それぞれを二分割して実施した。調査区の呼称は東からA区～D区である。つぎに遺跡の所在地を地形的にみると、阿摺川が矢作川に合流する500m手前の右岸側に該当し、ここに広がる面積10万㎡にも及ぶ緩やかな傾斜地帯の一角を占めている。なお、遺跡の標高は、ほぼ230mをはかる。現在の地目は、畑地である。

遺構 今回の調査で検出できた遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝などの他、谷地形があり、調査区がほぼ居住域に該当していることが予想される。検出された遺構を年代的にみると、縄文時代～近世にまで及ぶが、各時期については数例を数えるに留まり、それほどまとまりを持ったものではない。以下、今回の調査で検出した遺構について主なものについて説明を加える。

まず、竪穴住居であるが、A区とC区でそれぞれ1軒ずつ、合計2棟を検出している。A区で検出できたものは、縄文時代前期末のもので、プランが円形を呈する。検出面での直径は5m、深さ60cmをはかる。周囲には支柱穴が巡る。中央には焼土の分布範囲が2か所認められ、いずれも周囲には、直径20cm程度の小土坑がみられる。これを石の抜き取り痕と判断するのであれば、石囲い炉であったことが予想できる。なお、南側の炉については中央に円筒深鉢型土器を埋め込んでいる。また、B区で検出できた竪穴住居は、古墳時代後期のもので、プランがほぼ正方形を呈する。検出面での一辺は4m、深さは10～20cmをはかる。中央には、土器を埋めた土坑が存在している。上面が若干被熱している状況か



遺構図 (縮尺 1 : 2000)

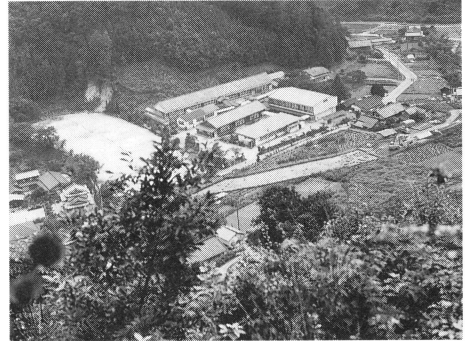
ら、炉であったことも考えられる。

つぎに掘立柱建物であるが、A・B区を中心として8棟検出している。これらは、地形による制約を受けて存在していることが考えられる。いずれも規模が2間×3間程度で、底をもたない形態を取り、なかには柱通りの悪いものもみられる。柱穴の掘形は、プラン円形がほとんどで、大きさは検出面で直径40cm前後、深さ40～50cm前後のものが大半である。一部には柵を伴っているものもみられるが、いずれも小規模である。

最後に谷地形であるが、C区の北東½を占め、現在の谷の方向に向かってゆるやかに展開している。埋土中の遺物は、ベース上から縄文土器片、ベースから30cm上方に堆積する黒色土中から弥生時代中期の土器片が出土している。年代は、出土遺物の時期をそのまま当てはめるのならば、検出した部分が、ほぼ弥生時代まで谷として存在していたことが考えられる。

まとめ 今回の調査は面積4500㎡に及び、三河山間部での遺跡のあり方を考える上で貴重な資料を提供したといえる。なお、遺物については今回は時間の関係で触れることができなかったが、整理箱（30×50×15cm）で50箱程度に留まり、多量とはいいがたいが、遺跡が美濃と三河の中間地帯に存在していることから、その性格は多様なものとなっている。

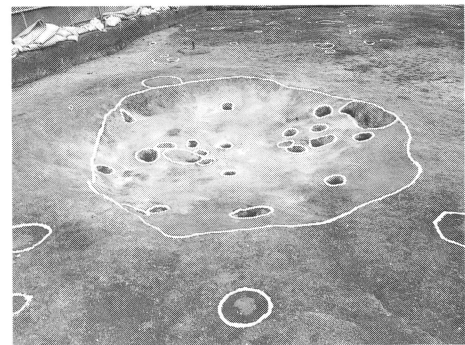
（池本正明）



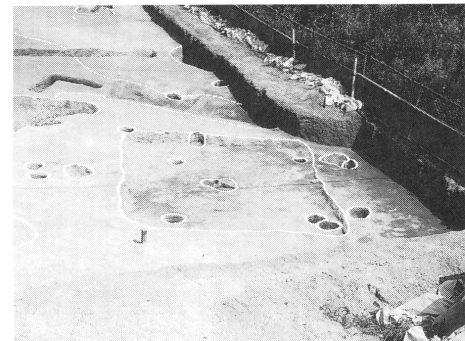
遺跡風景



90A区 全景



90A区 S B01



90C区 S B01